

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：25201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520871

研究課題名(和文) 明治日本の軍隊と近代中国のナショナリズムの形成

研究課題名(英文) The Influence of Japanese Army in Meiji Era to The Formation of Nationalism in Modern China

研究代表者

李 曉東 (LI, XIAODONG)

島根県立大学・総合政策学部・教授

研究者番号：10405475

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：近代日本に留学した中国人留学生在近代中国のナショナリズムの思想形成と運動の展開に重要な一翼を担っていた。留学生たちは、ナショナリズムが興隆していた日本において、西洋の近代的知識を受容し、天下国家から近代的ネイション・ステートへの意識転換を実現した。そして、学生たちの近代的ネイション意識を表しているものの一つは軍国民思想であった。軍国民思想は、最も早い時期のナショナリズム運動を支える理念として、そして、近代中国の政治変動方向に大きな影響を与えた思想として、清末民初に大きな影響力を持っていた。本研究は、これまできわめて不十分だった軍国民思想に関する研究の空白を埋めたものである。

研究成果の概要(英文)：The study is about the influence to the formation of nationalism in modern China. The Chinese students who were learning in Japan accepted western modern thoughts in Japan and changed their consciousness from traditional dynasty to nation state. The word symbolized their nationalism thought was "JunGuoMin". The study searched the origin of the word and found that the word was first used by Tokutomi Soho's Minyusha after Sino-Japanese War, and then discussed the meaning of JunGuoMin for the modern China.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：軍国民 ナショナリズム 尚武 愛国

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年冷え込んでいる日中関係を考える場合、日中両国のナショナリズムが勢いづけられていることをめきにして語れない。

(2) 中国のナショナリズム及びその形成に関する研究はこれまで数多くある。しかし、中国のナショナリズムは、戦前日本への抵抗のなかで形作られただけでなく、その形成の初期から明治日本から大きな影響を受けていたという事実は十分に重視されていない。とくに軍隊(軍事思想、理念、教育を含む)の視点からの日中両国のナショナリズムに関する研究はほとんどなされていない。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、近代日本に留学した日本陸軍士官学校の学生をはじめ、若い中国人留学生や知識人たちに対する明治日本の軍隊の影響を明らかにして、近代中国のナショナリズムの形成及びその歴史的な性格を考察するものである。軍隊という視点から近代日中両国のナショナリズムの連鎖・対立関係を明らかにすることによって、近代の日本と中国におけるナショナリズムの多面的な性格をあぶり出すことが本研究の目的である。

(2) 留学生たちに影響を与えたと考えられる同時代の論説を検討し、四民平等、国民皆兵、尚武精神、忠君愛国などの思想や理念が、どのように軍の留学生たちのなかに浸透し、彼らのナショナリズムをはじめとした諸思想や運動に影響を与えたかを探求する。そして、日本の影響で形成された留学生たちのナショナリズムなどの諸思想が、近代中国の政治にどのように反映されたのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 関連する資料の調査と収集。a. スタンフォード大学に所蔵されている蒋介石日記を読み、軍の留学生である蒋介石の日本観、日本留学の彼の思想に対する影響を確認する。b. 北京、広州、上海、杭州など、中国各地に散在する陸軍士官学校の留学生の雑誌『武学』の収集に努めた。

(2) 関連分野の専門家や研究者との交流を深める。連携研究者、研究協力者と日常的に研究会を開いて議論を深めると同時に、台湾の中央研究院近代史研究所所長黄克武氏をはじめ、関連分野の専門家にインタビューをし、意見交換をした。また、海外から北京大学の尚小明教授、華僑大学の胡連成准教授などを招聘して、神奈川大学留学史研究会との共催でシンポジウムを開催して、議論を深めた。

(3) 収集した資料を読み込み、歴史学と思想史の方法を以て研究対象を考察し、近代中

国のナショナリズムについて、学会や国際シンポジウムで報告し、論文を作成した。

4. 研究成果

(1) 近代日本に留学した中国人留学生が近代中国のナショナリズムの思想形成と運動の展開に重要な一翼を担っていた。留学生たちは、ナショナリズムが興隆していた日本において、西洋の近代的知識を受容し、天下国家から近代的ネイション・ステートへの意識転換を実現した。そして、学生たちの近代的ネイション意識を表しているものの一つは軍国民思想であった。軍国民思想は、最も早い時期のナショナリズム運動を支える理念として、そして、近代中国の政治変動方向を大きく影響した思想として、清末民初に大きな影響力を持っていた。にもかかわらず、これまで、「軍国民」思想に関する研究はきわめて不十分だと言わざるを得ない。本研究は従来の研究の空白を埋めたものとして位置づけられる。

軍国民思想は1902年に留学生たちによって初めて提起された。最初に論じたのは、『新民叢報』の創刊号と二二号に相次いで載せられた、日本陸軍士官学校の学生だった蔡鍔による「軍国民篇」と蔣方震の「軍国民教育」、それから、留学生雑誌『遊学訳編』の第一号に載せられた訳者不明の「武備教育」と題する翻訳であった。

軍国民思想は「尚武」と「国魂」をその基本内容としている。それはすなわち軍国民思想の教育を通して尚武と愛国の精神を養成し、「文弱」で国家とは何物かを知らない中国の人々の精神を改造することである。日本に留学した中国人留学生によって最初に提起された軍国民思想は、直観的でわかりやすいため、中国に紹介された後に、外交と内政両面で危機状況に臨んでいた中国で迅速にその影響を拡げ、近代中国のナショナリズムの形成を大きく推進した力になっていた。

そして、軍国民思想の源流は、実は日本であった。留学生たちは日本社会の尚武、国魂精神を体感しながら、日本の言論界から大きな影響を受けた。なかでも、留学生たちにもっとも直接的で決定的な影響を与えたのは、徳富蘇峰の民友社が出版した『武備教育』と尾崎行雄の『尚武論』や『支那処分案』であった。『尚武論』は弱肉強食の世界の中で、日本は「柔弱驕奢」の悪弊を克服し、「尚武」しなければならないことを主張し、日清戦争後に書かれた『支那処分案』と『武備教育』は、敗戦した清国の「再起復讐」を防ぐために、清国を永遠に屈服させなければならないと主張し、「武備教育」を「制清策」の第一歩として捉え、または最終的に清国を併合すべきだということを主張した。

これらの書物における中国に対する批判や、露骨な侵略などの言論は留学生たちを大きく刺激した。しかし、弱肉強食の世界観が支配的であったなかで、留学生たちはこうし

た刺激に反発するよりも、むしろそれを劇薬として受け入れた。同時代の留学生たちはこれらの書物を自分たちのナショナリズム形成の重要な思想的資源としたのである。

日清戦争後に日本のナショナリズムが変質し始めたことはよく指摘されている。徳富蘇峰の「平民主義」から帝国主義への転向もまさにこの時期であった。留学生たちは蘇峰や尾崎行雄をはじめとした日清戦争後の日本の言論界から大きな影響を受けながらも、彼らは何よりも重視していたのは、いかに国家の独立と富強を実現するかという課題であった。独立した近代的国民国家を創立するために、「国魂」を鑄造し全人民の近代的国民意識を養成しなければならない、このような抵抗、独立論理としての軍国民思想というナショナリズムは、健康的な性格を保持していた。

(2) 軍国民を唱える留学生に影響を与えたのは、日本の言論界だけではなかった。初めて軍国民を唱えた蔡鍔と蔣方震はいずれも梁啓超を師として仰いでおり、梁啓超の思想から大きな影響を受けた。

筆者は「改良派」とされてきた梁啓超の「革命」観について考察した。梁啓超は、湯・武革命を含むいかなる易姓革命もあくまでも「王朝革命」であり、根底からひっくり返すような Revolution ではない、と喝破した。進化論が支配するなかで、そして、強大な西洋諸国を前にして、梁啓超は、中国は根底からの変革をしなければ生存できないと考えた。彼にとって、復古の易姓革命はけっして真の革命ではありえなかった。梁啓超は清末の「革命派」の行動を「王朝革命」を免れないものとして危惧し反対した。梁啓超は革命家ではなかったが、彼は revolutionist だった。清末、易姓革命をはじめとした伝統的民本思想が絶えず取りあげられていた。それらがただ西洋近代の革命を理解するための「クッション」の役割を果たしたただけではなかった。「革命派」にとって、「順天応人」の革命は自分たちの「造反」行動を正当化するための思想的資源であり、「三代」の理想的な政治は自由、平等などの近代的な価値と共通したものであった。

しかし、易姓革命の意義はただ革命活動を正当化するための道具ではなかったし、民本思想もただ民主主義を説明するための「附会」の手段ではなかった。伝統的な民本思想と近代的デモクラシーとは、やはり内在的に結びついていたと考えられていた。梁啓超は、湯・武革命を含む易姓革命の限界性を指摘し、それを近代的 revolution と峻別した一方、民本思想家黄宗羲を大々的に取り上げ、その思想を称えた。彼が黄宗羲を「中国のルソー」と呼んだのも、民本思想の限界性を認識しつつも、そのなかに含まれる民主主義に通じる思想を確信したのである。われわれは梁啓超の立憲思想のなかに両者の結合をみるこ

ができる。「改良派」梁啓超は近代的 revolutionist であったが、彼はけっして伝統を否定しようと考えていなかった。彼は伝統的民本思想の理念を近代的に読み換えることによって、うちから根本的な変革を目指そうとした。

(3) 近代中国の代表的な啓蒙思想家は梁啓超以外に、さらに厳復を挙げなければならない。筆者は厳復の立憲政治観を考察して、その性格を明らかにした。

厳復にとって、清朝は、政府が政府としての責任を放棄する「放任政体」であった。そのため、彼は権力間の相互牽制を唱えるモンテスキューの三権分立論に同意できなかった。イギリスの憲政が厳復の目に映ったのは、むしろその相通じ相資する権力間の協働と調和という側面であった。彼が主張した「扶治」機関としての議会は、単に政府の権力を制限する役割を果たすだけでなく、強い政府を創出するためにサポート（扶治）する機関でもあったのである。

以上の厳復の主張は、その後の国会速開請願運動によって受け継がれた。「放任政体」における無責任の政府を「責任のある政府」に改造するために、速やかに国会を開設すべきだという主張は、清末にいち早く「国会速開」論を打ち出した楊度によって唱えられ、それがさらに梁啓超へと繋がり、結局、清末国会速開請願運動を支える論理となった。

「天人相関」の伝統的自然法思想のなかで、「泰・通・和」が理想的な状態だとされている。ただし、このような状態はけっして「上」から「下」へ、という一方通行的なものではなく、それは「循環」と「交代」というダイナミックスのなかで形成されたものである。このような「泰・通・和」の理想のなかに、君主や君権を相対的なものとして捉え、それを制限しつつ民意を大事にするという観念が初めから埋め込まれていた。

このような伝統的自然法思想を踏まえて、近代中国の知識人たちが中国における立憲政治を構想するとき、政治権力を「制限」する重要さを認識しつつも、「調和」を重視した。それは彼らが「外圧」という外的要因を意識していたからのみならず、根本的にやはり彼らにおける「調和」の観念が伝統的自然法思想を反映しているからだと言ってよい。中国の知識人たちにとって、「制限」と「調和」の役割を同時に担う「扶治」機関としての近代的議会制度は、民本思想の表出と実践を制度的に保障する装置にほかならなかった。知識人たちにとって、それこそが立憲政治の最大の意義であったのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

李曉東、「改良派」梁啓超の「革命」、『中国 社会と文化』第26号、2011年7月、158-176頁、査読有。

李曉東、笈克彦與近代中国立憲構想的展開、『憲政與行政法治評論』(第六卷)中国人民大学出版社、2012年3月、356-374頁。

李曉東、中国対日外交的課題、『外交觀察』(2012年秋季号)中国社会科学文献出版社、2012年9月、149-166頁。

李曉東、立憲の中国的論理とその源泉、『政治思想における言語・会話・討議』(『政治思想研究』第13号)2013年5月、214~244頁、査読有。

〔学会発表〕(計8件)

「近代中国立憲政治観の性格」第10回日本・韓国政治思想学会国際学術会議「東アジアの歴史と思想」(於成蹊大学)2011年9月。

「権威主義与法治之間 論嚴復民初的政治思想」清華大学日本研究センター「從世界史的角度看中国社会变化与日本 - 辛亥革命100周年国際学術研討会」(於清華大学)2011年9月。

「中国における近代的アイデンティティの歴史的形成 - 『革命』論の展開を手掛かりに - 」、『多元的世界の構築におけるアイデンティティの創生』成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「多元的世界の構築におけるアイデンティティの創生 - アジア・中国の磁場から」第二回シンポジウム、2012年3月。

「近代中国の『国会』に対する理解と受容」、国際ワークショップ「Translating the West, Past and Present: Japan, China and Korea」(日・中・韓における西欧思想“翻訳”の問題:政治・経済・倫理から)(於横浜国立大学)2012年6月17日。

「北東アジアにおける日中関係と中国外交」中国山東省社会科学院主催、日中韓国際シンポジウム「ポスト金融危機における北東アジア地域の発展と協力」2012年9月25日。

「軍国民思想と近代中国ナショナリズムの形成」中国浙江大学主催国際シンポジウム「蒋介石と近代中国」2013年4月。

「近代中国の革命観」中国東北師範大学東亜文明中心講演会2013年9月。

「嚴復の自由観」ドイツイェナ大学啓蒙主義研究所主催のシンポジウム「啓蒙主義と東アジア」2013年10月。

〔図書〕(計1件)

飯田泰三・李曉東編『転形期における中国と日本 その苦悩と展望』国際書院、2012年10月、9-25、307-309頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

李 曉東 (LI Xiaodong)
島根県立大学・総合政策学部 教授
研究者番号: 10405475

(3) 連携研究者

飯田泰三 (IIDA Taizo)
島根県立大学・総合政策学部 教授
研究者番号: 00061218